

# 論文再設計の最前線：日本生物物理学会による「AI共著論文専門誌」創刊とその波及効果

Gemini 3.1 pro

## 1. イントロダクション：学術出版界におけるパラダイムシフトの幕開け

2026年6月24日、世界の学術界に極めて大きな波紋を投じる方針が明らかとなった。日本の京都市に拠点を置く日本生物物理学会(BSJ)が、人工知能(AI)を「共著者」として公式に認定する論文を専門に扱う、新たな国際科学誌を創刊する計画を発表したのである<sup>1</sup>。この構想は、現在の学術出版において厳格に維持されてきた「著者とは人間(あるいは人間の集団)であるべき」という根本的な大原則に対する直接的かつ野心的な挑戦である。

学会が発表したタイムラインによれば、いきなり新雑誌をローンチするのではなく、まずは本年度(2026年度)中にAIが論文の評価、すなわち査読や編集作業の補助に関与する「仮想的な編集室」を設置することが予定されている<sup>1</sup>。この仮想編集室での運用実績と課題の洗い出しを経て、5年後をめどに完全なオンライン誌として専門誌を創刊する方針が示された<sup>3</sup>。

現在、生成AIや大規模言語モデル(LLM)は、文献調査からデータ解析、さらには論文の草稿作成に至るまで、研究プロセスのあらゆる段階に深く浸透している。にもかかわらず、主要な科学誌の多くはAIの著者適格性を強硬に否定し続けており、結果として水面下での「申告されないAI利用」が蔓延するという不透明な事態を招いている<sup>2</sup>。日本生物物理学会の試みは、この現実と建前の乖離を埋め、AIが研究のエコシステムにおいて果たす役割を可視化しようとする画期的な取り組みとして位置づけられる。本レポートでは、この「AI共著論文専門誌」が構想された理論的背景、既存のグローバルな出版ポリシーとの比較、学術コミュニティにもたらすメリットと不可避の深刻なリスク、そして「科学的知識の正当化」という認識論的基盤に与える影響について、包括的かつ詳細に分析を展開する。

## 2. 日本生物物理学会の構想とその理論的背景

日本生物物理学会が世界に先駆けてこのような特異な専門誌の創刊に踏み切った背景には、生命科学における「自動化と自律化」という不可逆的なメガトレンドに対する、学会トップの極めて強い危機感と先見の明が存在する。

### 2.1. 「シンギュラリティ生物学」と研究の完全自動化

学会長であり、大阪大学産業科学研究所長を務める永井健治氏は、この構想の発表に際し、「AIとロボットによって自動的に研究が進む時代がすでに到来している」と明言した。同氏はさらに、「リスクを恐れて避けるのではなく、現実に向き合わなければ取り残される」と述べ、AIの急速な発展に対する先制的な適応の必要性を強く訴えている<sup>6</sup>。

永井氏のこの発言は、単なるトレンドへの追従ではなく、同氏が長年牽引してきた研究領域の延長線上にある。同氏は2018年から「シンギュラリティ生物学」と呼ばれる学術変革領域研究の代表を務めており、生命科学、ナノバイオサイエンス、そしてAI・ロボティクスの融合による新たな研究手法の

開拓を行ってきた<sup>9</sup>。2026年3月6日には、日本生物物理学会とラボラトリーオートメーション協会の共催により、大阪大学において「論文再設計：生成AI・AGI時代の学術出版の未来」と題する公開シンポジウムが開催された<sup>11</sup>。このシンポジウムでは「著者がAI、編集部もAI」という極めて挑発的な問いが出発点として掲げられ、AIエージェントと自律型ロボットによる仮説検証の自動化、そしてそれに伴う学術出版プロセスの根本的な見直しが多角的に議論された<sup>11</sup>。新ジャーナルの創刊は、このシンポジウムで共有された「来るべきAGI(汎用人工知能)時代へのインフラ整備」という文脈の中で具現化したプロジェクトであると言える。

## 2.2. 新ジャーナルの位置づけと5年間のロードマップ

学会が発行を計画している新ジャーナルは、学会の既存の英文誌である『Biophysics and Physicobiology (BPPB)』の関連誌として位置づけられる見込みである<sup>6</sup>。特筆すべきは、掲載される論文において「人間の著者を代表とし、AIは共著者とする」という明確な役割分担が規定されている点である<sup>6</sup>。これは、AI単独の研究成果を認めるのではなく、あくまで人間を「研究の統括者(Principal Investigator)」として据え置きつつ、AIの貢献をクレジットとして明示化するアプローチである<sup>15</sup>。

この目標に向けたアプローチは非常に漸進的である。いきなり未知の運用ルールでジャーナルを立ち上げるのではなく、まずは今年度中に「仮想編集室」を立ち上げ、AIが査読や編集作業の補助にどこまで関与できるのか、またそのプロセスにおいてどのようなハルシネーション(情報の捏造)やバイアスが混入し得るのかを安全な環境で検証する<sup>1</sup>。この5年間のモラトリアム期間は、AI共著という新たなパラダイムに対する学術界のコンセンサスを形成し、必要なガバナンス体制を構築するための必須のプロセスと解釈できる。

# 日本生物物理学会のAI共著専門誌創刊に向けた5カ年計画



本年度に設立される仮想編集室での技術検証を経て、5年後にAI共著が認められるオンライン専門誌の創刊へと至る段階的なロードマップ。

Data sources: 日刊薬業, デイリースポーツ online

## 3. 学術出版のグローバルスタンダードとAI排除のコンセンサス

日本生物物理学会の構想がいかに革新的であり、同時に物議を醸すものであるかを正確に評価す

るためには、2026年現在の世界の学術出版界における強固なコンセンサスを理解する必要がある。現在、学術出版のメインストリームは「AIの著者適格性の完全な否定」で一致している。

### 3.1. 説明責任とオーサーシップの不可分性

Elsevier、Springer Nature、Wiley、Taylor & Francis、SAGEといった世界的な「ビッグファイブ」と呼ばれる大手学術出版社や、出版規範委員会(COPE)の方針は極めて明確である。それは、「生成AIおよびAI支援技術はいかなる場合も著者や共著者として記載してはならない」という原則である<sup>16</sup>。Elsevierの2026年版「Generative AI Policies for Journals」によれば、著者は文献の統合やアイデアの創出、言語の改善といった原稿準備のタスクにおいてAIツールを使用することは認められている。しかし、これらのツールは人間の批判的思考の代替として使用されてはならず、すべての出力結果に対する最終的な「説明責任(Accountability)」は人間の著者が負わなければならないと規定されている<sup>17</sup>。オーサーシップとは単に「テキストを生成した」という行為の記録ではなく、その研究内容の正確性、完全性、公平性について公的に責任を負う能力を意味する。もし論文内に捏造されたデータや架空の引用が含まれていた場合、AIを懲戒処分にしたり、研究倫理委員会において弁明させたりすることは不可能である<sup>7</sup>。したがって、「責任を負えない存在は、著者としてのクレジットも享受できない」というのが現在の国際的なコンセンサスである<sup>18</sup>。

### 3.2. 査読プロセスにおけるAI利用の厳格な禁止

さらに、これらの主要出版社は、査読プロセスにおけるAIツールの利用に対しても極めて厳格な態度をとっている。大半の出版社は、査読者が未公開の原稿を一般的な生成AIツールにアップロードすることを完全に禁止している<sup>23</sup>。これは、未発表の研究データや斬新なアイデアが外部のAIモデルの学習データとして吸収され、機密性が失われるリスクを防ぐためである<sup>7</sup>。査読者がこの規則に違反した場合、査読資格の剥奪や制裁の対象となる厳しい措置がとられている<sup>23</sup>。

# グローバル出版基準と日本生物物理学会（BSJ）新方針の比較

評価項目	主要グローバル出版社（2026年）	● BSJ 新ジャーナル構想
AIのオーサーシップ	<b>厳格に禁止</b> AIツールを著者として認めない（全面拒否）	<b>共著者として承認</b> 人間の著者を代表とし、AIを共著者とする
説明責任の所在	<b>人間の著者が全責任を負う</b> AIが生成した内容も含め、著者が完全な責任を保持	<b>人間の代表著者</b> 代表となる人間の著者が責任を持つ体制
査読プロセスでのAI利用	<b>厳密に禁止</b> 査読者がLLMへ原稿をアップロードすることは禁止	<b>補助への活用を前提</b> 査読プロセスの補助的な役割としてAIの活用を目指す設計
開示の性質	<b>利用の明記を義務付け</b> 実質的なAI利用は自己申告による開示が必要	<b>透明化・前提化</b> AIを共著者とすることで、利用自体が前提となり自然と明確化される

既存の主要出版社がAIの著者適格性を厳格に否定する一方、BSJの新ジャーナルはAIの共著と査読プロセスの補助への活用を前提とした設計を目指している。

Data sources: [デイリースポーツ online](#), [Elsevier](#), [Thesify.ai](#), [Pebblous](#)

## 4. 現実と建前の乖離：水面下で拡大するAI依存

しかし、このような厳格な方針が維持される一方で、実際の研究現場におけるAIの浸透度合いは、出版側のポリシーをはるかに凌駕する速度で進行している。現在、インパクトファクターの高いジャーナルの約83%がAI利用に関する何らかの開示ポリシー（MethodsやAcknowledgementsでの記述義務）を設けているが、それが実効性を持っているとは言い難い状況にある<sup>26</sup>。

### 4.1. 『Nature Human Behaviour』が示す驚異的なAI利用率

2026年に『Nature Human Behaviour』誌で発表された大規模な統計調査は、この「現実と建前の乖離」を如実に示している。研究チームが2020年から2024年にかけて出版された100万件以上の科

学論文のプレプリントおよび本論文を分析した結果、学术界全体にAIが蔓延していることが統計的に証明された<sup>28</sup>。

研究分野	論文アブストラクトにおけるAI利用の痕跡(推定割合)
コンピュータサイエンス	22.5%
物理学	9.8%
数学	7.8%

データ出典:『Nature Human Behaviour』(2026)<sup>28</sup>

研究者たちは、ChatGPT登場以前のテキストと比較して、LLM特有の隠されたパターンを特定した。「pivotal(極めて重要な)」、「intricate(複雑な)」、「showcase(披露する)」といった、人間の科学論文では従来あまり頻繁には用いられなかった特定の単語の出現頻度が異常に高まっていることが確認されている<sup>28</sup>。著者の中にはプロンプトの残骸をそのまま残してしまうようなケースもあるが、多くは巧みにAIの痕跡を消して投稿しており、競争の激しい分野や短い論文においてAIへの依存度が高い傾向が見られた<sup>28</sup>。

## 4.2. ICLR 2026における「AI査読危機」と自己申告の限界

査読プロセスにおいても、AIの密かな利用は深刻なレベルに達している。2026年に開催された機械学習分野のトップカンファレンスであるICLR(International Conference on Learning Representations)における事態は、既存のポリシーが限界を迎えていることを如実に示した。Pangram Labsの調査報告によれば、ICLR 2026に提出された76,139件の査読レポートのうち、実に21%がAIによって生成されたものであることが判明した<sup>24</sup>。

さらに問題なのは、自己申告と実際の利用との間に横たわる「沈黙のギャップ(Silence Gap)」である。同調査によれば、AIを利用したと自己申告した割合がわずか9%であったのに対し、実際の検出率は36%に達していた<sup>24</sup>。これは、出版社や学会が「AI利用の開示」をルールとして義務付けたとしても、著者がそれを正直に申告するインセンティブが働かず、ポリシーが形骸化していることを示唆している。日本生物物理学会が新ジャーナル構想で直視しようとしているのは、まさにこの「誰もが使っているのに、誰も正確にその範囲を申告しない」という偽善的なシステムの機能不全であると言える<sup>2</sup>。

## 5. AI共著化・査読導入がもたらす革新と実利的メリット

既存の枠組みが限界を露呈する中、日本生物物理学会が打ち出した「AIを共著者として公式に認定し、査読・編集にも組み込む」というアプローチは、学術エコシステムに対していくつかの強力なメリットをもたらす可能性を秘めている。

### 5.1. AI介入の徹底的な透明化と再現性の確保

最大のメリットは、「透明性(Transparency)」の劇的な向上である。現在のポリシー下ではAIの利用

を認めることが「不正」や「手抜き」と見なされるリスクがあるため、研究者はAIの関与を隠蔽しがちである<sup>2</sup>。その結果、解析コードや仮説生成の過程がブラックボックス化し、他の研究者が実験を追試することが困難になるという「再現性の危機」を助長している。

しかし、新ジャーナルのようにAIを公式な共著者として迎える「安全な実験場」が提供されれば、著者はAIを隠す必要がなくなる。データの解析において、どのモデル(例: Claude 3.5、GPT-4oなど)を使用し、どのようなシステムプロンプトを与え、何回の対話を経て結論を導き出したのかというプロセス全体を、堂々と論文の付録やメソッドとして記述できるようになる<sup>7</sup>。この極めて詳細な来歴情報の共有は、結果として研究の透明性を高め、第三者による検証を容易にする。皮肉なことではあるが、AIの権利(クレジット)を認めることが、人間がAIを利用した研究の「再現性」を担保する最も有効な手段となり得るのである<sup>7</sup>。

## 5.2. 非英語圏および小規模研究室のエンパワーメント

言語の壁とリソースの格差という、学术界における長年の構造的課題を解決する手段としても期待される。AIツールは、論文の論理構造の整理、高度な学術的英語表現への翻訳、図表のキャプション案の作成、そして複雑なデータ解析用のスクリプト記述において、もはや一般的な人間の能力を凌駕しつつある<sup>7</sup>。

学会長の永井氏が言及するように、AIによるリアルタイム翻訳や高度な執筆支援が制度として正当化されれば、非英語圏の研究者は「英語の壁」という本質的ではないハンデから解放され、純粋な科学的アイデアの質のみで勝負することができるようになる<sup>29</sup>。また、十分な研究支援人材や高額な解析ソフトウェアを抱えられない小規模なラボであっても、AIを「有能なリサーチアシスタント」あるいは「仮想的な共同研究者」としてフル活用することで、大規模ラボに対抗し得る研究アウトプットを持続的に発信することが可能となる<sup>7</sup>。

## 6. 認識論的基盤の変容と内在する深刻なリスク

新ジャーナルの構想がもたらす革新性は疑いようがないが、同時にそれが孕むリスクは極めて深刻かつ根源的である。AIを共著者とし、さらには仮想編集室において査読システムにも組み込むという設計は、近代科学が数百年かけて築き上げてきた「科学的知識の正当化」という認識論的基盤(Epistemological Foundation)そのものを解体する危険性を内包している。

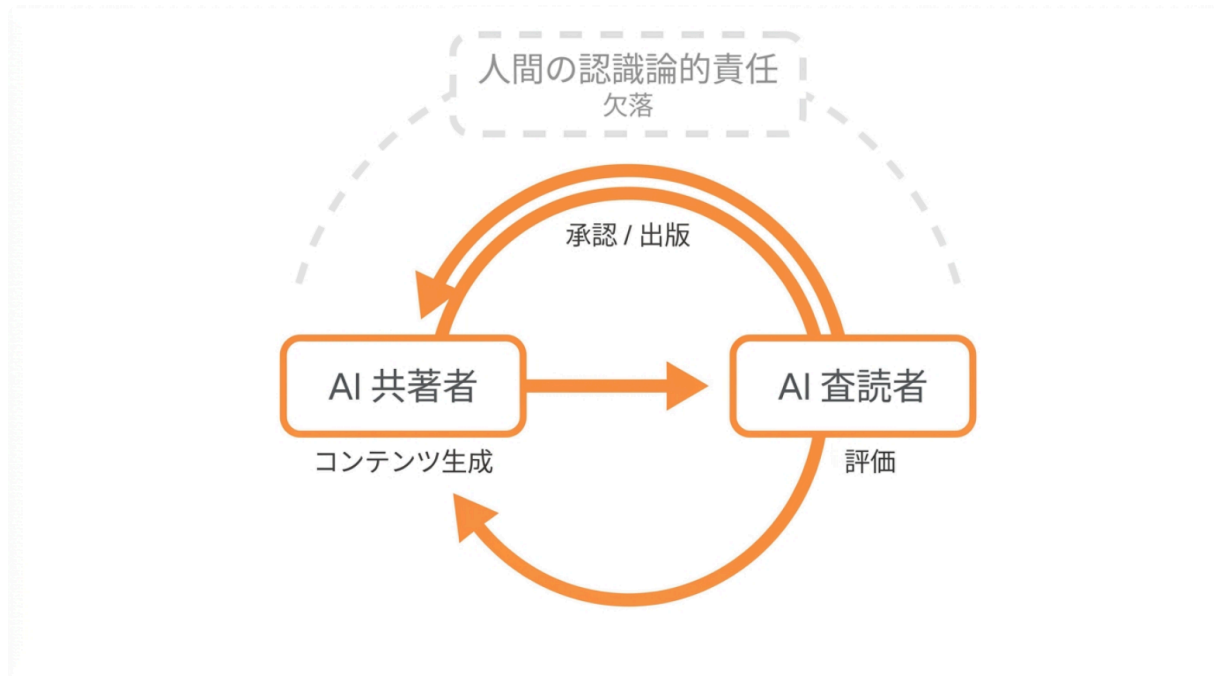
### 6.1. 「著者」と「査読者」の役割混同とブラックボックス化

本構想に対する最も鋭い批判的視座は、AIを「共著者」として扱うこと(帰属の問題)と、AIを「査読・編集の補助」として用いること(検証の問題)を同一線上で扱っている点にある<sup>2</sup>。

本来、科学的知識は、ある研究者が自らの知見と名誉を懸けて提示した仮説(オーサーシップ)を、同等の専門知識を持つ独立した第三者が批判的に検証し、その妥当性を保証する(ピアレビュー)という、厳格な緊張関係によって構築される。しかし、AIが生成あるいは深く関与した論文を、仮想編集室において別の(あるいは同じ基盤モデルの)AIが評価するという構造は、この検証プロセスを閉じた循環ループ(Closed Loop)に陥らせる<sup>2</sup>。

AIの出力はあくまで大規模なデータセットに基づくパターン認識と確率論的な生成の産物であり、人間のように自らの専門的知見や知的な信用(Credibility)を懸けて論文の正当性を担保する「認識論的責任」を負うことができない<sup>2</sup>。この循環系の中に人間による独立した批判的検証(Human Oversight)が明確に位置づけられなければ、査読システムそのものがブラックボックス化し、社会全体が科学に対して抱いている信頼が静かに、しかし確実に侵食されていくことになる<sup>2</sup>。

## AI主導の出版エコシステムに潜む「循環的検証」のリスク



AIが共著として生成したコンテンツを、AI査読システムが評価する閉じたループ。人による認識論的な責任（Epistemic Responsibility）の担保が抜け落ちることで、科学的信頼性が損なわれるリスクがある。

### 6.2. 幻覚（ハルシネーション）と架空の引用による汚染

AI共著化が引き起こすもう一つの巨大なリスクは、AI特有の「幻覚（Hallucination）」による文献情報の深刻な汚染である。LLMは極めて説得力のある文章を生成する一方で、実在しない架空の論文、誤ったDOI（デジタルオブジェクト識別子）、実在しない著者を、文脈に適合するようにでっち上げる性質を持っている<sup>7</sup>。

実際の出版界では、2024年から2025年にかけて、AIが捏造した参考文献の検証を著者が怠ったために、数十件の論文が撤回や訂正に追い込まれるという事態が相次いで発生した<sup>30</sup>。AIを共著者として認める専門誌において、人間の筆頭著者がAIの出力に対して一行単位での厳密な検証を行わないまま、大量の「AI生成論文（事実上のペーパーミル）」が投稿・受理されてしまえば、科学的記録の正確性は致命的に毀損される<sup>7</sup>。

### 6.3. 先行事例「Project Rachel」が鳴らす警鐘

このリスクが単なる杞憂ではないことは、2025年に実施された「Project Rachel」というアクションリサーチによって実証されている<sup>18</sup>。このプロジェクトの研究チームは、「Rachel So」という名前の完全なAI学術アイデンティティ（Google Scholarプロフィール等を含む）を構築し、AIが完全に生成した10本以上の研究論文を2025年3月から10月にかけて実際に出版することに成功した<sup>18</sup>。

驚くべきことに、このAIアイデンティティであるRachel Soが書いた論文は他の人間の研究者から実際に引用され、さらにRachel So宛てに査読の依頼まで舞い込む事態となった<sup>18</sup>。この研究は、超人的な能力を持つAIシステムが、人間を前提として構築された既存の学術評価システム(ORCIDやDOIなどのアイデンティティ検証メカニズム)をいかに容易にすり抜け、システムの盲点を突くことができるかを痛烈に証明した<sup>31</sup>。AIが高度に自律化する中で、AIを共著者として迎え入れるシステムは、こうした「なりすまし」や「責任の所在の蒸発」を防ぐための全く新しい認証・ガバナンス基盤を必要とするのである。

#### 6.4. 親学会への信頼失墜と「不安」に基づく制度設計

日本生物物理学会が直面する最も直接的なリスクは、この新ジャーナルが学会全体の信頼性に与える波及効果である。前述の通り、新ジャーナルは学会の伝統ある既存英文誌『BPPB』の関連誌として位置づけられる<sup>6</sup>。しかし、新ジャーナルにおけるAI査読の独立性や厳格さが担保されず、質の低い論文が乱発される事態となれば、暗黙の信頼保証を与えている親ジャーナル(BPPB)や、日本生物物理学会そのものの学術的権威を著しく失墜させるリスクがある<sup>2</sup>。

学会長は「現実に向き合わなければ取り残される」と語っているが、システム設計が「トレンドに取り残されることへの不安」のみを駆動因として進められた場合、科学出版に絶対的に求められる厳密性や批判的検証機能が犠牲になる危険性が高いという指摘は、真摯に受け止められるべきである<sup>2</sup>。

### 7. 今後の展望：新たなパラダイムにおける技術的対策と人間の役割

日本生物物理学会の構想が直面するこれらの課題に対し、学术界およびテクノロジー界隈ではすでに具体的な対策や新たなプロトコルの模索が始まっている。新ジャーナルが5年後の創刊を成功させるためには、以下のような技術的・制度的基盤の確立が不可欠となる。

#### 7.1. BPPBにおける「AI Reviewer」の開発とセキュアな検証

学会の既存誌であるBPPBは、査読プロセスにおけるAI利用に対して、すでに現実的なアプローチを採用している。BPPBの現在のガイドラインでは、査読者が未公開の原稿を一般的なオンラインの生成AIツールや翻訳プラットフォームにアップロードすることを、機密保持の観点から厳格に禁止している<sup>25</sup>。

しかし、AIの有用性を完全に排除するのではなく、その代替手段として、編集事務局の内部に閉じた安全な生成AIシステムを通じて原稿を評価する「AI Reviewer(AI査読者)」の開発を進めている<sup>25</sup>。このAI Reviewerによる評価出力は、担当編集委員(Editor-in-Charge)に直接提供され、要望に応じて人間の査読者にも共有される仕組みとなっている<sup>25</sup>。機密性を担保したクローズドなAIシステムを学会側がインフラとして用意し、人間の意思決定を補助するツールとして厳格なコントロール下に置くというこの手法は、新ジャーナルが本年度に立ち上げる「仮想編集室」の技術的基盤となる可能性が高い。

評価システム	提供形態	メリット	課題
一般的なLLM(	パブリッククラウド経	無料または低コスト	機密漏洩リスク、ハルシネーションの混

ChatGPT等)	由	ト、利用が容易	入、説明責任の欠如
BPPBのAI Reviewer	編集事務局のクローズドシステム	機密保持の担保、フォーマットの統一的なスクリーニング	人間による最終的な科学的判断(新規性や妥当性の評価)の代替は不可

データ出典:<sup>25</sup>に基づく比較分析

## 7.2. デジタル来歴管理(Provenance)の暗号学の実装

また、AIの関与を「共著者」という曖昧な概念ではなく、暗号学的に追跡可能なデータとして記録する新たなプロトコルの研究も進んでいる。「ClawXiv」と呼ばれる出版ワークフローの提案では、AIシステム(例えばClaude Sonnet 4.6など)が生成した成果物に対して、人間の署名者が固有の暗号鍵(Ed25519 keypair)を生成してハッシュ署名を行い、そのAIが関与したというメタデータ(プロヴィナンス・サイドカー)を不可逆的に紐づける仕組みが実装されている<sup>35</sup>。

VS Codeなどの開発環境においても、パブリックな「共著者」としてAIを扱うのではなく、プライベートな来歴記録(AI-Provenance-Record)として、セッションID、ツールソース、レビューのステータスなどをコミットメッセージに埋め込むアプローチが提案されている<sup>36</sup>。新ジャーナルが真に透明性を担保するためには、単なるテキストによる「自己申告」に依存するのではなく、このような機械的・暗号学的な来歴管理システムを論文投稿のインフラストラクチャとして組み込むことが求められるだろう。

## 7.3. 結論: 研究統括者(Principal Investigator)としての人間

日本生物物理学会による「AI共著論文専門誌」の創刊方針は、単なる出版ルールのマイナーチェンジではなく、科学研究のあり方そのものが根本から変容している現状への強烈なアンチテーゼである。世界の主要な国際誌が「人間による執筆と責任」という旧来のパラダイムを固守し、AIの利用をあくまで補助的な位置付けに留めようとする中、本構想はAIを明確な「アクター」として学術エコシステム内部に公式に組み込もうとする、極めて野心的な社会実装実験である。

本レポートの分析が示す通り、この試みは研究プロセスの透明化、再現性の向上、そして非英語圏研究者や小規模ラボのエンパワメントという多大なメリットをもたらす可能性を秘めている。しかし同時に、AIが生成したコンテンツをAIが評価するという「認識論的ブラックボックス」の構築、幻覚による科学データベースの汚染、そして親学会の信頼性失墜という致命的なリスクと常に隣り合わせである。

今後5年間にわたる「仮想編集室」での試行錯誤を通じて、学界が直面する最大の課題は、AI技術自体の精度向上ではない。それは、「法的・倫理的責任を負うことができないAI」に対して、人間の研究者や編集者がどのように介入し、「認識論的責任(Epistemic Responsibility)」を接続し直すかという、極めて人間的・哲学的な制度設計の問題である。これからの時代の人間は、単に定型的なテキストを執筆する作業員ではなく、AIの推論を導き、物理的な論理を強制し、査読の批判を予期して全体をマネジメントする「研究統括者(Principal Investigator)」としての役割を担うことになる<sup>15</sup>。「AIか人間か」という旧態依然とした二項対立を乗り越え、自律的な知的エージェントと共いかに新しい科学的真理を構築し、それに対する社会の信頼を担保していくか。日本生物物理学会の先駆的な

取り組みの成否は、まさにその一点にかかっている。

## 引用文献

1. AI共著論文専門誌創刊へ5年後めど、オンラインで - MTJ ONE, 7月 2, 2026にアクセス、<https://mtj.jiho.jp/news/trend/3467>
2. AIを論文査読に使う危険性——日本生物物理学会の新誌構想が示すリテラシーの問題 - note, 7月 2, 2026にアクセス、<https://note.com/jrdoctor/n/nc6bcc79d2d42>
3. 【独自】AI共著の論文専門誌創刊へ | 山陽新聞 さんよも, 7月 2, 2026にアクセス、<http://nm.sanyo.oni.co.jp/sp/newspack/2026/06/post-941018.php>
4. 【独自】AI共著の論文専門誌創刊へ5年後めど、オンラインで - nippon.com, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.nippon.com/ja/news/kd1442318983264257016/>
5. 全国ニュース【独自】AI共著の論文専門誌創刊へ5年後めど, 7月 2, 2026にアクセス、[https://jomonet.co.jp/ns/2026062401000402/news\\_zenkoku.html](https://jomonet.co.jp/ns/2026062401000402/news_zenkoku.html)
6. 【独自】AI共著の論文専門誌創刊へ - デイリースポーツ, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.daily.co.jp/society/main/2026/06/24/0020512073.shtml>
7. Is a new international scientific journal specializing in 'papers with AI ...', 7月 2, 2026にアクセス、[https://note.com/pharma\\_i\\_cist/n/n757670625804?hl=en](https://note.com/pharma_i_cist/n/n757670625804?hl=en)
8. AIを「共著者」と認める科学誌が誕生へ！日本生物物理学会が異例の ..., 7月 2, 2026にアクセス、<https://note.com/hansard/n/n4306268c7c17>
9. KAKEN — 研究者をさがす | 永井 健治 (20311350), 7月 2, 2026にアクセス、<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000020311350/>
10. 永井 健治 (Takeharu Nagai) - マイポータル - researchmap, 7月 2, 2026にアクセス、<https://researchmap.jp/ng1>
11. 【公開シンポジウム案内】論文再設計: 生成AI・AGI時代の学術出版の未来 (2026/3/6) - 日本生物物理学会, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.biophys.jp/news/lib/newsshow.php/7209>
12. [公開シンポジウム案内]論文再設計: 生成AI・AGI時代の学術出版の未来 (2026/3/6), 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.zoology.or.jp/archives/news/symposium-20260306>
13. 公開シンポジウム「論文再設計: 生成AI・AGI時代の学術出版の未来」 - 日本細胞生物学会, 7月 2, 2026にアクセス、[https://www.jscb.gr.jp/jscb/event\\_info/jscb\\_event\\_info-7251/](https://www.jscb.gr.jp/jscb/event_info/jscb_event_info-7251/)
14. 公開シンポジウム「生成AI・AGI時代の学術出版」 - Science Aid Blog, 7月 2, 2026にアクセス、<https://portal.science-aid.com/events/ai-for-publication-2026>
15. Co-Authoring with AI: How I Wrote a Physics Paper About AI, Using AI - arXiv, 7月 2, 2026にアクセス、<https://arxiv.org/html/2604.04081v1>
16. Authorship and AI tools | COPE - Committee on Publication Ethics, 7月 2, 2026にアクセス、<https://publicationethics.org/guidance/cope-position/authorship-and-ai-tools>
17. Generative AI policies for journals - Elsevier, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.elsevier.com/about/policies-and-standards/generative-ai-policies-for-journals>
18. Project Rachel: Can an AI Become a Scholarly Author? - arXiv, 7月 2, 2026にアクセス、<https://arxiv.org/html/2511.14819v2>

19. AI Policies in Academic Publishing: 2026 Guide & Checklist - Thesify, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.thesify.ai/blog/ai-policies-academic-publishing-2026>
20. The use of generative AI and AI-assisted technologies in writing for Elsevier, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.elsevier.com/about/policies-and-standards/the-use-of-generative-ai-and-ai-assisted-technologies-in-writing-for-elsevier>
21. Science journals set new authorship guidelines for AI-generated text, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.niehs.nih.gov/news/factor/2023/3/feature/2-artificial-intelligence-ethics>
22. AI in scholarly publishing | Science Sessions - PNAS, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.pnas.org/post/podcast/ai-scholarly-publishing>
23. Use of artificial intelligence tools in the publishing process: expectations from publishers through author guidelines - Frontiers, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.frontiersin.org/journals/research-metrics-and-analytics/articles/10.3389/frma.2026.1740510/full>
24. When AI Reviews AI — ICLR 2026's 21% AI Peer Review Crisis | Pebblous, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://blog.pebblous.ai/report/iclr-2026-ai-peer-review-crisis/en/>
25. Instructions for Authors | Biophysics and Physicobiology (BPPB), 7月 2, 2026にアクセス、  
[https://www.biophys.jp/biophysics\\_and\\_physicobiology03.html](https://www.biophys.jp/biophysics_and_physicobiology03.html)
26. Journal AI Policies 2026: What Authors Must Know - Manusights, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://manusights.com/blog/journal-ai-policies-2026>
27. AI in Peer Review: What the New Journal Policies Mean for Authors in 2026, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.journalmetrics.org/blog/ai-peer-review-policies-medical-journals-2026>
28. How scientists caught AI writing their colleagues' papers - Fast Company, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.fastcompany.com/91383240/how-scientists-caught-ai-writing-their-colleagues-papers>
29. Message from President | The Biophysical Society of Japan, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.biophys.jp/org/org01-e.html>
30. AI Policy in Academic Publishing: What Researchers Must Know (2026) - Thesis Ace Writers, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://www.thesisacewriters.com/blog/ai-policy-in-academic-publishing-2026-guide>
31. Project Rachel: Can an AI Become a Scholarly Author? - arXiv, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://arxiv.org/html/2511.14819v1>
32. Project Rachel: Can an AI Become a Scholarly Author? | Request PDF - ResearchGate, 7月 2, 2026にアクセス、  
[https://www.researchgate.net/publication/397779705\\_Project\\_Rachel\\_Can\\_an\\_AI\\_Become\\_a\\_Scholarly\\_Author](https://www.researchgate.net/publication/397779705_Project_Rachel_Can_an_AI_Become_a_Scholarly_Author)
33. [2511.14819] Project Rachel: Can an AI Become a Scholarly Author? - arXiv, 7月 2, 2026にアクセス、  
<https://arxiv.org/abs/2511.14819>

34. AI Peer Review in 2026: The ICLR Problem Isn't Going Away - Manusights, 7月 2, 2026にアクセス、<https://manusights.com/blog/ai-peer-review-2026>
35. ClawXiv: a signed archival workflow and distributed publication architecture for human-AI collaborative research - arXiv, 7月 2, 2026にアクセス、<https://arxiv.org/html/2604.16476>
36. VS Code Copilot Co-Author, When AI Attribution Becomes a Supply Chain Trust Problem, 7月 2, 2026にアクセス、<https://www.penligent.ai/hackinglabs/vs-code-copilot-co-author-when-ai-attribution-becomes-a-supply-chain-trust-problem/>